
素晴らしい娘

村上まゆみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

素晴らしい娘

【Nコード】

N7642E

【作者名】

村上まゆみ

【あらすじ】

エフロン・ディーア……素晴らしい娘……と名づけられた少女は、自分が「素晴らしい娘」であれば、人々の関心は思いのままになるものと知りながら育った。自分の美貌、才知、そして性格のよさ。すべてを自覚して、「素晴らしい娘」として完璧な生き方をしていたつもりだった。しかし、「素晴らしい娘」の心には、ひそかに残酷な感情が秘められていることも。そんな「素晴らしい娘」はある日、庭師の息子ピーターと友だちになる。村の学校に通うピーターの前で、「素晴らしい娘」は少しずつ心を開いていくのだが、残忍

な感情がある日、偶然、見せてしまう……。少女の心の闇と、救いを描いた大人の童話。

前編

今から約一世紀半ほど前の昔、エシユタオルという国のロンシユ
タットと呼ばれる地方に素晴らしい娘エフロン・ディーアと呼ばれる女の子がおりまし
た。

素晴らしい娘は、公爵家の令嬢として育ち、父親の公爵さまは外
交官というお仕事をなさっておいででした。公爵さまは仕事柄、ど
うしてもロンシユタットのお屋敷を留守にしがちでしたが、素晴ら
しい娘はお父さまのことをとても深く尊敬しておりました。もちろ
ん、隣国の貴族出身のとても美しくお綺麗なお母さまのことでも大
好きです。素晴らしい娘のお父さまとお母さまは、王さまのお城で
開催された舞踏会で知りあったとのことでしたが、素晴らしい娘は
何度もせがんで美しいお母さまの口からこのお話を繰り返して聞いた
ものでした。そして自分の社交界デビューの時を、細かく隅々まで
心に思い描いては、白昼夢に耽っていたのです。

赤い絨毯の上を高貴な人々の優美な足がゆきかい、いくつもの輪
を形成して、笑いさざめきあいながら踊り続ける　素晴らしい娘
は自分が社交界にデビューする日を、栄えある日とせずと心待
ちにしていました。

（わたしは美しく素晴らしい娘だから、きつとたくさん貴族の
王子さまがわたしと踊りたがることだろう　そうしたらわたしは
ちよつとはにかみながら、まあ一体どうしましょうといった風情で、
彼らのうちのひとりの手をとり、踊りの輪の中へと加わるのだわ）

素晴らしい娘はそうした白昼夢に耽ることが大好きな娘でした。
そして勉強時間に家庭教師のヴラマンクさんに叱られてばかりいま
した。

素晴らしい娘はこの家庭教師のヴラマンクさんが大嫌いだったの
ですが、仕方なしにいつも先生の言うことを黙って聞いていました。
何故素晴らしい娘が家庭教師のヴラマンクさんの言うことをいつも

黙って聞いていたかというのと、それにはきちんとした立派な理由があります。それは素晴らしい娘が、素晴らしい娘だったからなのです。

素晴らしい娘のお父さまとお母さまは、自分たちの娘が素晴らしい娘に育つようと、彼女に素晴らしい娘という名前をつけました。だから素晴らしい娘はいついかなる時も素晴らしい娘でいなければならず、そのことは彼女にとってなかなか骨折りなことではありませんが、決して骨折り損で終わるということでもなかったようです。

素晴らしい娘は本人も自覚しているとおり、とても容姿の美しい娘でありましたので、誰からも好かれておりました。それで素晴らしい娘はすっかり味をしめてしまったようなのです。いついかなる時も自分が素晴らしい娘でありさえすれば、人々の歓心は自分の思いのままになるということを……。

しかし、素晴らしい娘自身はまだ気づいておりませんが、彼女が素晴らしい娘であり続けるということは、同時にとても恐ろしいことでもあったのです。素晴らしい娘は小さな頃から近隣諸国の外国語を五つも教えこまれ、またそれに加えて数学や歴史などの一般教養、さらにどこに出しても恥かしくないようにと、その他色々な稽古ことを習わなくてはなりません。テーブルマナーの授業やピアノにダンス等……素晴らしい娘は日曜日以外の時を、ほとんどお勉強とお稽古ごとばかりをして過ごしていました。

素晴らしい娘はなんといっても素晴らしい娘ですので、素晴らしい娘としての役割を果たして、お父さまとお母さまを喜ばせなくてはなりません。けれども十三歳になったある時、素晴らしい娘は自分の中にいるもうひとりの自分 ナフロン・ティアー 恐ろしい娘を見つけだしてしまいました。このことは何も素晴らしい娘が病的な二重人格者であったとか、そういったようなことはありません。

ある時、素晴らしい娘は下男のディックが仕掛けたネズミ捕りに

一匹のネズミが引つかかっているのを見つけました。可哀相に……
などとは素晴らしい娘はこれっぽっちも思いません。

(こんなチャチなネズミ捕りに引つかかるだなんて、なんていう馬鹿なネズミなんだろう)

素晴らしい娘はそう思いました。そしてこの時、ある閃きが素晴らしい娘の心を強烈に捉えたのです。

(このように馬鹿な子ネズミは、死刑に処せられなければならないわ……)

そう考えついた素晴らしい娘は、赤い舌で唇の端をぺろりと舐めると、そのネズミをネズミ捕り機ごと、木綿の大きな袋に入れることにしました。そして屋敷の裏手をずつと歩いていったところにある その場所もロンシュタットのお屋敷の領地内でした 川まで人目を避けるようにして歩いて行き、その生きたネズミをネズミ捕り機ごと川の中へと沈めてしまったのです。なんとという恐ろしいことでしょう！素晴らしい娘は苦しみもがいているネズミを川の流れの中から引きだすと、またもう一度川の深いところへ沈めました

そして素晴らしい娘は五六回そうやってネズミ捕り機を引き上げたり、川の中へとまた沈めたりを繰り返しました その後にようやくネズミが死んだのを見届けると、
(やっと死んだわ。それにしてもなんてしぶといネズミだったことでしょう)

と思いました。

素晴らしい娘は草むらの中にネズミの死骸とネズミ捕り機とを放り投げ、何くわぬ顔をして屋敷へと帰っていききました デイックがネズミ捕り機がネズミごとなくなったのをとても不思議がっていましたが、素晴らしい娘は知らないふりをしていました…… そうです。素晴らしい娘は人から素晴らしい娘と呼ばれるのが大好きなだけで、本当はちつとも素晴らしい娘などではない、恐ろしい娘だったのです。

ところで、素晴らしい娘には同年代の友達というのがひとりもありませんでした。勉強などは家庭教師がどの教科も一対一で見られますし、ピアノやダンスなどのお稽古ことはすべて個人授業でした。素晴らしい娘のお母さまは素晴らしい娘を出産する前に、ちよつとした不注意によって子供をひとり亡くしておりましたので、素晴らしい娘をこの他大切に育てあげようとしていたのです。けれども、素晴らしい娘の心はそれは寂しいものでした。お父さまはお屋敷を留守にしがちであり、お母さまはお体が弱く、病気がちでした。ばあやや侍女を相手に遊んでも、とりたてて面白いというほどのことはありません……そこで素晴らしい娘は、ひとりで楽しく遊ぶことを覚えたのです。ひとつはさきほどもいったような白昼夢に耽ることであり、ふたつ目は小さな動物や昆虫などをいじめて遊ぶことでした。

素晴らしい娘は広い屋敷の領地内にあるお庭で、よく昆虫いじめをして遊びます。蟻の足を一本だけ折ってみたり。その蟻はバランスを崩しながらも、そのまま歩き続けてゆきました。大きな黒い蜘蛛の腹部だけを潰してみたり。その蜘蛛は頭部と足の部分だけになってしまいました。なんと！そのまま歩き続けてどこかへ行ってしまいました。雨上がりのある日には、ミミズを何十匹となく殺害したこともあります。

ミミズというのは非常に不思議な生き物で、まっふたつにちよん切っても、まだそのままうねうねとのたうっているのです。

(まあ、面白い)

そう思った素晴らしい娘は、ミミズというミミズを次から次へと水たまりのほとりでちよん切ってゆきました。そして最後にはそのミミズのどれもが気持ち悪くなってきましたので、まっふたつにちよん切ったミミズの全部を大きな石でぐちゃぐちゃにしてとどめをさしたのです。

とても不思議なことなのですが、こうしたことは素晴らしい娘にとって素晴らしい娘であり続けるための、大切な儀式なのです。素晴らしい娘は家庭教師に叱られたり、ばあやから行儀作法のことで厳しく注意されたりすることがあると、蝶々やトンボの羽を引きちぎったり、野良猫の頭や体に石をぶついたりして遊ぶのです。そうするとまたお屋敷では素晴らしい娘として振るまえると、こういっただけなのです。

3

そしてそんなある日のこと、素晴らしい娘は庭の噴水のほとりでひとりのみすばらしい少年に出会いました。みすばらしい少年は庭師のジャックの息子で、名前をピーターといました。ピーターはお父さんのジャックを手伝って、庭木の剪定をしているところだったのです。

素晴らしい娘は噴水の縁の大理石に腰かけると、ジャックやピーターが缺でチヨキチヨキと生垣やオンコの木などを剪定していくところを眺めていました。すると、ピーターと素晴らしい娘の目と目が、視線と視線とが会いました。ピーターは素晴らしい娘の美しい容貌に面食らってしまい、危うく梯子から足を踏み外すところでした。そして素晴らしい娘はといえば、とても退屈して死にそうでありましたので、この林檎のように赤いほっぺをしたみすばらしい少年に、ちよこつとちよっかいをだしてやろうと、そんな気になったのです。

「ねえあなた、名前をなんというの？」

「……ピーター」

少年は素晴らしい娘の顔も見ずに小さな声でそう答え、チヨキンチヨキンと缺を動かし続けました（気のせいか、少し手元が狂っているようです）。

「としはいくつなの？」

「じゅうさんだよ」

「まあ、わたしと同じどしなのね。えらいわ、そのとお父さまを手伝ってお仕事をしているだなんて……」

ピーターはとても恥かしがり屋さんだったので、素晴らしい娘にそれ以上はなんとも答えずにいました。

するとふたりの様子を近くで見ていた庭師のジャックがこう言ったのです。

「お嬢さん。こんなやつで良かったら、少し話相手になってやってくださいいな。こいつはどうも内気でいけねえ。この間も学校でいじめられて、前歯を二本折ったんでさあ」

ピーターはますます恥かしくなったので、梯子を降りると、鉄を地面に置いて、果樹園のほうへと走って逃げてしまいました。

素晴らしい娘はピーターの後を追って果樹園の林檎の木の下にまで辿り着くと、激しく息をつきながらピーターの隣に座り、こう話しかけました。

「……あなた、村の学校に通ってるの？ねえ、学校では一体どんな授業をするのかしら？先生はどんな人？学校は楽しい？」

ピーターはもともと真つ赤なほっぺをますます真つ赤にししながら、こう答えました。

「そんなにいつぺんに聞かれてもわかんないよ。きみは学校に行っていないの？」

「ええ、そうよ。家庭教師の先生がきちんとついて、とても退屈な授業をするの。ヴラマンクさんっていう人なんだけど、わたしはあの先生のことが大嫌いなもの」

「へえ……それは大変だね。大嫌いな先生からつまらない授業を受けなきゃならないだなんて。ぼくの学校の先生はとってもいい人だよ。シャーロット先生ついていてね、とても優しい上に、とても綺麗な先生なんだ。ただ……」

「ただ？」

「さつき親父が言ってただろ？学校にはぼくのことをいじめる奴が

いるんだ。格好悪い話だけどさ、そいつらがぼくの目の前に足をいきなり突きだしたから、ぼく、気がつかなくて床に思いっきり顔をぶつけちまつたんだ。それで前歯が二本折れたの」

「まあ……」

素晴らしい娘はピーターに深い同情を示すかのように、ぎゅっと彼の両手を握りしめました。そして恥かしがる彼の青い両目を覗きこみながら、こう言ったのです。

「ちよつとその前歯を見せてちょうだい」

ピーターは首を横に振りましたが、素晴らしい娘はなんとしても譲りませんでした。

「ちよつとだけでいいのよ……」

懇願するようにそう言うと、ピーターの体を押し倒して、自分の両手で無理やりに彼の唇をこじあげたのです。

「あらまあ。なんだかとおつても痛そうね。歯を折った時、どんな気持ちだったの？」

「どんなつて……そりゃあとても痛い気持ちさ。それとても惨めな気持ち。ぼくが奴らの足につつかかつてびつたーんと床にキスしちまうと、教室中が大笑いの渦なんだもの。恥かしくてもう学校へなんか行けないよ」

ピーターは素晴らしい娘に大きく唇を開かれても、特別抵抗はしませんでした。恥かしいと思う気持ちはもちろんありましたが、それ以上に素晴らしい娘の素晴らしい容貌にほれぼれとしていましたので、黙って口を開かれるがままにされていたと、そういうわけです。そして素晴らしい娘はというと、暫くの間ピーターの体の上に覆いかぶさつたままで、こんなことを考えていました。

（この男の子はどうして両方のほっぺがこんなに真っ赤なんだろう？もしかしたら……）

「ねえあなた、もしかして林檎病か何かなの？」

「え！？ち、違うよ。ぼくは自分でもよくわからないけど、昔から両方のほっぺたが真っ赤なんだよ。だけど病気ってわけじゃないよ

……」
ピーターは早く起き上がりたかったのですが、素晴らしい娘があまりじろじろと遠慮なしに自分のことを眺めまわすので、黙って顔を背けることくらいしかできませんでした。

「ふうん。でもなんだか可愛らしいわ、あなたのほっぺ。まるで太陽をふたつはつつけたみたい」

素晴らしい娘がやつと体をどけてくれたので、ピーターは体を起こすと、林檎の樹の根元に背中を寄りかからせることにしました。そして素晴らしい娘の美しい横顔を見つめながら、こう思いました。（どうしてぼくはこの娘に腹を立てたりしないんだろう……前までは赤いほっぺのことをちよつとでも言われただけで、嫌で嫌で仕方なかったのに……なんだかとても不思議な娘だ）

ピーターはぼうつとなっていました。素晴らしい娘がまた自分と真っ直ぐに向き直ったので、どきつとして目を逸らしました。

「ねえピーター。あなた、ネズミを殺したことってある？」

「え、ネズミかい？うん、まあそりゃあね。でも何匹退治しても、あいつらは今もうちの屋根裏部屋や台所の片隅にしつこく住み続けているんだ。毎月きちんと家賃を払ってもらいたいくらいだよ」

素晴らしい娘がとてもおかしそうに笑いましたので、ピーターも一緒になって笑いました。あまり大きく口を開けると前歯のなのがはつきりと見えてしまうのですが、そんなことは少しも気にせずに、大きな声でふたりして笑いあいました。

「ピーター。わたし、あなたにならなんだかわかってもらえそうな気がするわ。実はわたしね……」

素晴らしい娘はそこまで言いかけたのですが、ちよつどその時、ピーターの父親のジャックがピーターを呼びにきてしまいましたので、話はそれきりになってしまったのです。素晴らしい娘はピーターに必ずまた遊びにくることを固く約束させると、引きとめていた手を放して、彼を去らせました。

こうして素晴らしい娘とピーターとは友達になったというわけで

す。

4

素晴らしい娘はピーターとのことを素晴らしい秘密にしようと、そう思っていました。素晴らしい娘はお勉強やお稽古ごとの合間にピーターと会い、そして色々なことをして遊んだり、また色々なことを話しあったりするようになっていました。ふたりは時の経つのも忘れて魚釣りをしたり、パチンコ遊びをしたり、ブランコ乗りをして遊んだりしました。そしてピーターは学校のことを素晴らしい娘に話して聞かせ、素晴らしい娘はロンシュタット屋敷で起こった様々なことをピーターに話して聞かせるのでした。ふたりは実際にバランス良く、お互いのことについて情報交換をしまいましたので、ピーターは学校へ行くことが次第次第に楽しくなり、素晴らしい娘もまた、ロンシュタット屋敷での退屈な出来ごとが、だんだんに面白くなってきたのです。それはつまりこういうことでした。

ピーターはいじめっ子のビリーやジョージのことが大嫌いでしたが（彼らが学校にいたので、ピーターは学校が面白くないのです）、素晴らしい娘と会って楽しく過ごす一時のことを思うと、彼らの意地悪がひどくつまらないように思えてきたのです。

（ビリーやジョージは知らないんだ。ぼくが学校の外で素晴らしい娘とどんなに素晴らしい時間を過ごすかってこと。せいぜいぼくのことを『リンゴのホツペ』だとか『歯抜けの間抜け』だとか呼ぶ方がいいよ。でもぼくは学校が終わったら素晴らしい娘と素晴らしい時間を過ごすんだ。彼らは素晴らしい娘と口を聞いたこともなければ、あの可愛らしい様子をいっぺんだって見たことすらないんだからな。哀れなもんさ）

そして素晴らしい娘もまた、ピーターと遊んだり話をしあったりする時間だけを楽しみに、一日の苦行を耐えるようになりました。素晴らしい娘にとってピーターと過ごす時間が少しでもあるのと

ないのでは、それこそ天と地との開きといっても過言でないほどの大きな違いがありました。

例えば、家庭教師のヴラマンクさんに外国語の綴り方の間違いを指摘されたり、何度聞いてもさっぱりわからない幾何の問題を繰り返しやらされたりしても、以前ほど腹立たしいとは思わなくなりました。

（きつとピーターも今ごろ、学校で同じようなことをしているのね……ああ、こんなつまらない授業なんてほっぼっておいて、ピーターに早く会いたいわ）

また、ばあやが何かと小うるさく小言を言ったり、ダンスの先生がステップの踏み方について繰り返し同じことばかりを言ったりしても、素晴らしい娘はこう思うのでした。

（ああ！今ここにピーターがいてくれたらねえ！わたし、ピーターがいつも一緒にいてくれさえしたら、どんなお説教でも何時間だって黙って聞いていられるでしょうよ！それにダンス！こんなおばさんを相手に踊ったところで、何が楽しいものかしら。ああ、ピーター！ピーターがもしここにいて、わたしとダンスを踊ってくれたとしたら、こんなに楽しいことはまたとないでしょうに！）

そうです。素晴らしい娘とピーターの願い、それはふたりがもつと一緒に同じ時間を過ごすことができたなら……というものでした。

ピーターは学校が終わると家のお手伝いがありますし、素晴らしい娘は詰めこみ式の授業を受けたあとにお稽古があります。日曜日の午後以外は 午前中はふたりとも、それぞれ別の教会へと礼拝に行くのです。そう長くふたりで過ごすことはできません。それでもその短いひと時、ふたりはとても幸福でした。

ピーターは魚を釣ることや、植物の名前や昆虫の名前、それから家畜を育てることなどについての知識を素晴らしい娘に教えることができまし、とりわけ、学校で起こった色々な面白い出来ごとについてのお話は、素晴らしい娘にとって興味の的になっていました。

学校にはどんな子供たちがいて、休み時間はどんな遊びをするのか、また学校で行われる授業がどんなふうなものかなど　素晴らしい娘はその話を聞けば聞くほど自分も学校へ行きたいと、そう強く望むようになりました。そうすればピーターと今よりもずっと長い時間を一緒に過ごすこともできるからです。そしてまた、素晴らしい娘は次のことにも気がついていました　ピーターが自分にしてくれるお話に比べて、自分がピーターにすることのできるお話はなんてつまらないものなのだろうということに。

素晴らしい娘は自分が今どんな勉強をしているのかだとか、テールブルマナーのことやダンスのステップの踏み方についてだとか、こうしたことがピーターにとってあまり面白くない事柄であるということが最初からわかっておりましたので、なるべくそうした話題は避けるようにしていました。けれども素晴らしい娘にはとりたてて他にすることのできるようなお話はありませんでしたから、やはり日常のちょっとしたことをお話する以外にはありません。そこでばあやが毎日決まって同じ小言ばかりを繰り返すので、そろそろほけてきたのではないかだとか、グラマンクさんの顔の造作や会話のアクセントのおかしいところを物真似して、ピーターを面白がらせたりするのです。

素晴らしい娘は一日に三四時間程度、自分ひとりで自由にできる時間がありましたので、その時間を有効に利用してロンシュタット家の領地内である、庭や森や川や湖でピーターと遊びました。

ふたりは、苔むした倒木を椅子にしてお互いのおやつを取り換えっこしたり、ゆるやかな丘の斜面を転げまわったりしては、大きな声で笑いさざめきあいました。

よく晴れた日曜日の午後には池や湖で泳いだりしましたし　服は樹にかけておいて乾かすのです　櫛の樹の上に大きな蜜蜂の巣があるのを見つけては、それを石やパチンコで遠くから落っこしたりしました　確かに巣は樹上から落っこちましたが、ふたりは蜜蜂たちの復讐が怖かったので、その草むらから一目散に逃げだし

ました。それともうひとつ。ピーターは素晴らしい娘につきあわされて、蜜蜂の巣を落とす以外にも色々残酷な遊びをしなくてはなりませんでした。

素晴らしい娘は意味もなく、小さな罪のない命を奪うことが大好きでしたので、ピーターと森の散歩道を歩きながら、たくさんの昆虫を殺害しました。そしてその殺し方があまりに無造作なので、最初のころピーターはあんまりびっくりして何も言えないくらいでした。そしてある日のこと。こんなことが起こったのです。

楡の樹の枝と枝の間に、大きな鬼蜘蛛の大きな巣が張り巡らされてありました。そしてその大きな蜘蛛の巣の片隅に、小さな醜い模様の蛾が一匹、引っかかってしまっていたのです。

ふたりは固唾を飲んで、ねばねばした蜘蛛の巣の上で繰り広げられる舞台劇を見上げていました。

小さな醜い蛾は一生懸命身じろぎしながら、なんとかねばつく糸から逃れようとしているのですが、どうしてもそのねばねばした粘着力から解放されることができません。すると、その小さな蛾の二倍はあるつかという鬼蜘蛛が、そろりそろりと小さな蛾に歩み寄りいったのです。小さな蛾はますます早く手や足や触覚を動かしましたが、羽がぴつたりと巣にくっついてしまっているのです、どうしても逃れることができません。そしてあともう一息というところで、ピーターが蜘蛛の巣を大きな石で破壊してしまっただけです。

小さな醜い模様の蛾は命からがら逃げ去ってゆき、鬼蜘蛛もまた、風に吹かれて地上に着地すると、どこかへ隠れていつてしまいいました。

「まあ、ピーター。あなたはなんていうことをするの。あの大きな蜘蛛はきつととてもお腹をすかせていたのよ。そして餌を捕えるためにせっせと寝る間も惜しんであの見事な巣を完成させたのに違いないのに……それをあなたはまあ、よりもよって石で壊してしまっただなんて！」

ピーターは素晴らしい娘がすっかり怒っているらしいことに気づ

くと、とても驚いてしまいました。ピーターにしてみたら、鬼蜘蛛が蛾の食事をするような、そんな残酷な場面を素晴らしい娘に見せたくなかったからこそしたことだったのに、素晴らしい娘はピーターのしたことを本気で腹立たしく思っている様子だったからです。彼女は地面を両足で何度も踏みしめながら、鬼蜘蛛の蛾を食べるところが見られなかったことを悔しがっていました。

「ねえ、そんなにきみはぼくのことがいけなかったっていうのかい？じゃあきみはあの気持ちの悪い模様の蜘蛛が、あの哀れな醜い蛾を食べるところをつぶさに見たかったとでもいうの？そんな残酷な場面を……」

「残酷ですって？何が残酷なものですか！ピーター、あなただったらどうなの？今日の前にとても美味しそうなおちそうがあつて、大変な苦労のあとにあともうちよつとでそれを食べられるという段になって、そのごちそうをとりあげられてしまったとしたら……」

ピーターは素晴らしい娘が何か間違つたことを正しく見せかけようとしていることに鋭く気づくと、言い負かされるまいとして語気を強めてこう言いました。

「エディア、それは間違つているとぼくは思うよ。いいかい？ぼくの言うことをよく聞くんた。昆虫と人間とでは立場が違うつていうことくらいは、きみにだってわかるだろう？確かにぼくはあの醜い蛾を鬼蜘蛛の巣を壊して逃がしてやった……でもこのことはとても大切なことなんだ。わかるかい？ぼくがあの変てこな模様の蛾を一匹逃がしてやったところで、ぼくには何の得にもなりやしないし、あの変てこな蛾はぼくがせっかく逃がしてやったのにも関わらず、明日にはまた別の蜘蛛の別の巣にとっつかまって食われているかもしれない。そうなれば、はっきりいって今ぼくのはなんの意味も持たないことになるのかもしれないね。じゃあぼくは一体なんのためにそんなことをしたのか、きみにはわかるかい？」

「わからないわ」と素晴らしい娘は答えました。

「それはね、どうしても見過ごすことができなかつたからだよ。ぼ

くは前々からきみに言おう言おうと思つてたんだけど、きみはやたらと無意味に小さいものの命を奪いすぎる。蟻の行列が道を歩いているのを見かけると、石でつぶしてみたり、足の裏で踏んづけてみたり……蝶々とかトンボとかバッタとか、苦勞して捕まえたあとで、なんであんなに意味もなく残酷に殺したりできるのさ。ぼくにはきみのそういうところがさっぱり理解できないよ」

ピーターのその言葉を聞くと、素晴らしい娘は頭の天辺にカツと血が上るのがわかりました。下唇をぎゅっと噛みしめ、両手をぎゅっと握りしめながらなんとか興奮による体の震えを堪えようとしましたが、素晴らしい娘にできたことはそこまでがせいぜいでした。それで、

「ピーターなんか大嫌い！」

と大きな声で叫ぶと、全速力でお屋敷に向かって駆けだしたのです。

（大嫌い！大嫌い！ピーターなんて大嫌い！）

帰り道、素晴らしい娘は涙を流しながら悔しがりました。そして気分が段々に落ち着いてくると、自分にピーターを言い負かすことのできる材料がたくさんあったことに気づきました。

（ピーターがなんといおうと、やっぱり正しいのはこのあたしよ。ピーターがああ鬼蜘蛛の巣を壊したのは、どう考えても自然の摂理に反したことだもの。そうよ、あたしのほうが正しいわ。ピーターは間違ってる。あんな鬼蜘蛛はまたどこかの樹の上に巣を作り、馬鹿な獲物が巣に引っかかるのを待ちつけることだろう……あんな醜い模様のちつとも綺麗じゃない蛾なんて、あの時食べられてしまったら良かったのよ。それを何よ。あんなつまらないことであんな偉そうにお説教したりなんかして……それも素晴らしい娘であるこのわたしに向かつて。見てらっしゃい、明日は必ず今日の仕返しをしてやるから！）

素晴らしい娘は自分の部屋の中をうろつくと歩きまわりながらしつこくそんなことを考え続け、心の中でピーターのことをちくりち

くりと針でも刺すかのように、言葉によっていじめていました。それは自分がこう言ったとしたら向こうはもう何も言えなくなるだろうといったような、素晴らしい娘の素晴らしい娘による、想像上の言葉遊びのようなものでした。そして素晴らしい娘が広い食卓でひとり寂しく食事をしていると　お母さまは御加減が優れないということで、寝室に引き籠っていましたから　ある素晴らしい考えが素晴らしい娘の脳裏に閃きました。

（これよ！これだわ！この言葉によってなら、あたしはピーターのことをきつともって言い負かすことができるわ！）

その時、素晴らしい娘はパンとシチューと七面鳥の蒸し焼きを食べていたのですが、シチューを音を立てないようにしてすすりながら　音を立てるとばあやがうるさいのです　七面鳥の狐色に焼けた肉を見ていてこう思いついたのです。

（ピーターだつてきつと、豚の肉や牛の肉や鶏の肉なんかを毎日食べているはずだわ。明日会ったらあたしはピーターにこう言っちゃりましょう。『あなたはきのうあたしに向かって残酷だと言ったようだけれど、じゃあピーター、あなたはどうかのかしら？あなただつて残酷なのではなくつて？罪のない小さな動物の肉を毎日食べているんですもの……鬼蜘蛛の食事だつてそのことと大して変わりがないんじゃないかしら？強いものが弱いものの命を奪う、それは自然の摂理よ。だからやっぱりあなたは鬼蜘蛛の巣を壊すべきではなかった。もしあなたがそれでも自分の意見を正しいとするのなら、今日からあなたは菜食主義者になるべきよ。ピーター、わたしの言いたいこと、わかるわね？）

素晴らしい娘は自分の素晴らしい勝利に酔いしれるかのように晚餐をすませると、自室に引き籠つて日記を書きつけることにしました。

その日の日記帳のページ数は十二ページにも及び、その内容はというと主に自分のこととピーターのことであり、彼がいかに間違つていて素晴らしい娘がいかに正しいか、といったようなことだった。

の
で
し
た。
。

後編

ところがその翌日、素晴らしい娘がいつもの待ち合わせ場所である果樹園の林檎の樹の下へ行くと、素晴らしい娘の復讐心は気まぐれな鳥の翼のようにどこかへすつ飛んでいってしまいました。素晴らしい娘は自分がピーターを言い負かすところを想像しながら屋敷の玄関からずっと歩いてきたわけなのですが、どういうわけか林檎の樹の下でおやつのお菓子を片手にニツコリと微笑んでいるピーターの姿を見ると、自分がきのう一日かけて考えていたことが、どうでもいいことのように思えてきたのです。

ピーターは素晴らしい娘の姿を自分の視界に認めると、ますますニツコリとして素晴らしい娘に挨拶しました。

「やあ、今日もいい天気だね。こう日照りが続くと小麦や大麦が駄目になっちまうから、そろそろ雨が降ってくれなきゃ困るってうちの父さんなんかは言ってるけどさ。でもそうするとぼくはきみに会えなくなるからね。今日は特に晴れてくれて良かったよ。きのうあんな別れ方をしたから、ずっと心配してたんだ」

(まあ、ピーターったら……)

素晴らしい娘はすっかり嬉しくなって、ピーターの手を自分から握りしめました。そしてふたりは手を繋いだまま、森の散歩道を歩いていったのです……。

けれどもこの日、素晴らしい娘とピーターが湖までの散歩へ出掛けたのは、もしかしたら間違いだったのかもしれない。いいえ、もしも正しい間違いという言葉遣いが許されるなら、今日ふたりに起こった出来ごとがそうであったといえるのかもしれない。

ふたりはまるで恋人同士のように手を繋ぎながら、楽しい話をし

て笑いあっていました。途中、道を横切る蟻んこが何十匹となく列をなしていました。素晴らしい娘はわざと踏みつけることなどはせずに、ぴよんとその列を飛び越えました。素晴らしい娘は蟻んこの小さな生命のことなど本当はどうでも良かったのですが、ただ愛するピーターに気に入られたくてそうしたのです。それから樹の上に大きな蜘蛛の巣があるのも無視しましたし、ひらひらと綺麗な模様のアゲハ蝶が目の前を横切っても、いつものように「早く捕まえて！」とピーターをせかすこともしませんでした。

素晴らしい娘はただじつとピーターの赤いほっぺの横顔を見つめ、こんなことを考えていたのです。

（ピーターは頬が真っ赤で、その上歯抜けでもあるけれど、よく見るととても端整な横顔をしているわ。それにわたしが問題にしたいのは、外見上のことなんかじゃないの！一番大切なことはピーターがわたしに近い、とても素晴らしい魂を持っているっていうことなんですもの。わたし、ピーターにならきつとどんなことでもしてあげられるのに違いないわ。ええそうよ！自分のこの赤い命を差し出すことだって！）

素晴らしい娘があんまり力をこめて自分のことを眺めやるので、ピーターはすっかりどぎまぎしてしまい、素晴らしい娘の手を握っている手のひらが、じつと汗ばんできてしまったほどでした。それじつと汗ばんでいるのが彼女にとって不愉快じゃないといいけどな、などと考えていました。

ふたりの会話は絶好調といっても差し支えないくらい、とても弾んでいましたし、そのうちにピーターは素晴らしい娘に何かしてあげたいような気持ちになってきました。

（素晴らしい娘はどうしてこんなに素晴らしい娘なんだろう。学校には彼女みたいに上品な女の子はひとりもないし、その上彼女の笑い方といったら、まるで赤ん坊みたいに無垢なんだもの。彼女のことをもし自分ひとりだけのものにするのができたとしたら、どんなにか幸福なことだろう）

そしてピーターが素晴らしい娘の美しい横顔に見とれながらそんなことをぼんやり考えていると、うしろの森のしげみのほうで、何故かニワトリの声が聞こえてきたのです。

「コツコツコツ、コケツコ」

どうやらそのニワトリはオスのニワトリらしく、ピーターと素晴らしい娘のうしろで突然に「コケコツコー！」と大声で鳴きだしたのです。これにはふたりともびっくりしてしまいました。ピーターは（どうしてこんなところにニワトリがいるんだろう？）と驚いて後ろを振り返っただけでした。ところが素晴らしい娘はそのニワトリの叫び声を合図とするかのようにすくと立ち上がると、湖のほとりの大きな石を両手でつかみ、逃げていこうとするニワトリを追いかけ、石を何度も振り下ろして、ニワトリのことをぶち殺してしまつたのです！なんとという恐ろしいことでしょう！素晴らしい娘はお洋服がニワトリの爪で引き裂かれたり、自分の腕が引つかかれて傷ついたりしても、一向にかまいませんでした。どうしてもこのニワトリを殺したいと、そう強く思いました。何もニワトリがピーターと自分の楽しいお喋りを邪魔したとか、そんなくだらないことが理由なわけではありません。素晴らしい娘はただそのニワトリを殺したかっただけです。殺したあとに毛を全部むしりとして、普段は白い羽毛に覆われている肌が本当はどうなっているのか、それを調べたかっただけです。そしてニワトリが血を流して死んでしまったあとに、まるで気でも違つてしまつたかのように、その白い羽毛を爪を立ててむしりとりはじめました。ピーターが素晴らしい娘の隣にきて、彼女の頬をぴしゃりと強くぶつまで、素晴らしい娘は何故か正気に戻ることができませんでした。

「エディア、しっかりするんだ！どうしてこんなことを……ニワトリが可哀相だとは思わないのかい！？このニワトリがきみに対して一体何をしたつていうんだっ。きのうのことといい、この哀れなニワトリのことといい、きみは本当に頭がどうかしてるよ。そうだ。きみは本当はちっとも素晴らしい娘なんかじゃない。本当はとて

恐ろしい、ひどく残酷な娘だよ！」

素晴らしい娘は茫然自失として、自分の血に汚れた両手を見つめ返していましたが、ピーターが死んだニワトリを連れていこうとするのを見ると、ことう問いかけました。

「……そのニワトリ、どうするの？」

自分でもひどく渴いた、変てこな声だと思いました。まるで自分の声ではないかのようでした。

「このニワトリはきつと飼われていたのが森に迷いこんできたんだ。このあたりから一番近い農家といえば、プレイスさんの農場だからね。ニワトリがいなくなつたかどうかを聞いて、もし違っているようなら、このニワトリはぼくが焼いて食べる」

その時、素晴らしい娘はピーターが恐ろしい顔の表情をするのを初めて見たと思いました。いつもはあんなに優しくて柔らかな表情しか見せたことのないピーターが、本気で怒っていたのです。

素晴らしい娘はたまらなく惨めな気持ちで、泣きながらロンシユタットのお屋敷へと帰ってゆきました。ニワトリが死んでしまったことはちつとも悲しいことではありませんでしたが、ピーターに嫌われてしまったことは、たまらなく悲しいことだったからです。

7

お屋敷へ帰りつくと、ばあやや侍女たちがこぞって、一体どうしたのか、何があつたのかと素晴らしい娘に向かって詰め寄りました。けれども素晴らしい娘は一言も口を聞かず、ばあやと侍女が何かと口うるさく言いながら手の甲や腕に残るニワトリの引っかき傷の手当てをするのに任せました。そして新しい洋服に着替え終わると、人払いをして、自分は極めて気分が優れないから自分の部屋で食事をすると侍女のひとりに言いつけました。

具合が悪い、と一度口にだしてそう言ってみると、なんだか本当に具合が悪くなってきたように、素晴らしい娘には感じられました。

そして夕暮れの窓辺に腰かけると、どうしてこんなことになってしまったのだろうと、悲しく自分を責めました。

（わたしは今度こそ本当にピーターに嫌われてしまった……素晴らしい娘であるはずのこのわたしが。それにそもそもどうしてこんなことになってしまったのだろう？ そうよ。あんなところにニワトリがやってきたのがいけないのよ。わたしは蟻の行列を避け、精緻な美しい蜘蛛の巣も無視し、綺麗な羽のアゲハ蝶も存在しないかのようにふるまった……それなのにどうして？ どうしてわたしはニワトリを無視することができなかつたんだろう？ ピーターのいる目の前であんなことをすれば、嫌われてしまうということはわかっていたはずなのに……ピーター！ ああ、ピーター！ あなたに許してもらえないのなら、わたし、どんなことだってするわ。わたしはもうピーターと知りあう前の自分には戻れない。ピーターに会うことが許されずにこの屋敷の中でまた同じことを繰り返していかないといけないのだったら……わたし、いつそのこと気が狂って死んでしまいたい！）

素晴らしい娘は侍女の運んできた食事には手もつけず、夜着に着替えるとベッドにもぐりこみ、ただひたすらピーターのことを考えて、涙に暮れました。そして素晴らしい娘はこの夜から、恐ろしい夢にうなされるようになったのです……ピーターと別れた日に見た夢は、こんな内容の夢でした。

素晴らしい娘はロンシユタット屋敷の食堂のテーブルにいて、いつものようにひとりぼっちでした。けれどもいつもなら、素晴らしい娘の来る前に整っているはずのお料理が、一皿もテーブルの上には乗っかっていません。おかしいな、と思って素晴らしい娘がもう一度よくテーブルの上を見てみますと、小さな白いお皿の上に、ちよこんとチーズが一切れ乗っかっています。まさかこれが自分の食事だともいうのだろうか、素晴らしい娘はばあやを呼ぼうと思いません。と、その時、一匹の汚らしいねずみはどこからともなく現れて、皿の上のチーズをかっぱらっていったのです。素晴らしい

しい娘は激怒しました。汚らしい子ねずみの分際で、ロンシュタツト家の食卓の上に乗つかるとはなんとという身分知らずなねずみだらう……このことは素晴らしい娘にとつてたまらなく許しがたいことでした。それでねずみの奴を追いかけて、屋敷内を部屋から部屋へ駆け抜けてゆくと、ふと、自分の知らない部屋があることに気づいたのです。おかしいな、と思つて入つてきたドアを振り返ると、そのドアから大きなねずみが　そのねずみは素晴らしい娘と同じくらしいの背丈のねずみでした　のっそりとやってくるではありませんせんか。素晴らしい娘は失神して、その場に倒れこみました。

(暗　転)

素晴らしい娘が次に夢の中で目を覚ますと、恐ろしい光景が目の前にはありました。その部屋の中には二匹のまるまると太つた夫婦のねずみがあり、チュウチュウと何か囁きあっているのです。

<このニンゲンをどうしよう？>

<そうだね。まずは全体を火であぶつて、焦げだらけになつたところで、塩やこしょうで味つけて食べてみることにしましょうか。美味しいかどうかはわからないけれど、まあひとつ試しに……>

この二匹の夫婦ねずみの会話を聞くと、素晴らしい娘は檻の一番隅のほうへと走つて逃げました。そうです。二匹のねずみたちは人間並みに大きくなつており、素晴らしい娘はといえば、ねずみ並みに小さくなつて、檻の中に閉じこめられていたのです。

力チャリ、とねずみ捕りの檻の扉が開くと、不気味なねずみの大きな手が、素晴らしい娘に向かって差しのばされました……。

「きゃあああ　！」

がばり、と素晴らしい娘がベッドの上に身を起こすと、あたりは漆黒の闇に包まれていました。

素晴らしい娘は汗びっしょりで、はあはあと荒い息をつきながら、
(今のは夢だつたんだ……)

と思いました。

そしてもう一度眠ろうとして枕の上に頭をのせると、今度は目が冴えてしまって、なかなか寝つかれませんでした。それにもう一度眠ってしまったとしたら、あの恐ろしい夢の続きを見はしないかと怖くもあつたので、素晴らしい娘は夜明けまで眠るまいとしてがんばり続けました。それからようやく夜明けの曙の光が窓辺に差し込んだ頃になって、再び深い眠りにつくことができたのです（そのあと夢は何も見ませんでした）。

素晴らしい娘はこの夜から重い病気を患うようになり、絶え間ないひどい頭痛と熱と吐き気に苦しめられ続けました。けれども素晴らしい娘は恐ろしい夢を見ることが怖くてたまらなかつたので、なるべく眠らないようにしなくては……とがんばり続けました。

医者は素晴らしい娘の両腕の傷跡を見て、動物から何か黴菌をもらつたのではないかと診断しました。そして診察のあとに注射を一本打ち、「少しの間様子を見ましょう」と言つて帰つていきました。医者は薬も服用するようにと置いていきましたが、素晴らしい娘はそんなものはきつこないと、自分自身でよくわかつていました。そしてもう自分は死ぬのだと、気が狂つて死んでしまうのだと、心からそう信じこんでいたのです。

医者がやつてきたのは素晴らしい娘が病気になつて三日目のことでしたが、二日目の夜、素晴らしい娘はこんな夢を見ました。その夢は素晴らしい娘がお父さまとお母さま、それからばあやの四人で馬車に乗りこむところから始まります。馬車に乗りこんだ時、素晴らしい娘はとても上機嫌でした。お父さまとお母さま、それにばあやと四人で馬車に乗つてどこかへ行けるだなんて、こんなに嬉しいことは滅多にあることはありません。けれども、馬車が最初はゆっくりと。そして段々に速くなつていくのにつれて、素晴らしい娘は何か様子がおかしい、ということに気づきはじめました。最初のうち、素晴らしい娘はとても上機嫌で、色々なことをお父さまやお母さまやばあやに話して聞かせていました。話の内容はすべ

てピーターに関する事で、ピーターがいつも学校でどんな授業を受け、どんな友達とどんな遊びをして休み時間を過ごしているか、また自分がどんなにピーターのことを愛しているかということまでピーターについて思っていることをすべて、素晴らしい娘はお話していました。すると、お父さまは何も言わずに顔の表情を曇らせ、お母さまはしくしくと泣きはじめるのです。ばあやに至っては「なんてことでしょう！」と目尻から涙をこぼしながら咳く始末でした。やがて馬車が止まると、御者台にいる御者がこう言いました（馬車に乗った時、その御者はヴラマンクさんだったのですが、今は素晴らしい娘の全然知らない男にすりかわっていました）。

「あんたたち、一応念のために言っておくけど、その娘は絶対助からんぜ。なにしろその娘は重度のミミズ病なんだからな」

（ミミズ病？）

素晴らしい娘は訳もわからずに病院の診察室に通され、医者は聴診器も何も使わずに、素晴らしい娘の顔を見るなりいきなりこう言いました。

「まことに残念ですが、娘さんの病気は近代の医療によってでは手の施しようのない、ひどい悪性の病気です。一度かかったが最後、十中八九まず直りません。娘さんの病名はミミズ病です。ミミズ病をご存じですか？」

素晴らしい娘のお母さまとばあやとは、感極まったかのように大声ですすり泣いて抱きあい、お父さまは何も言わず、ただ沈痛な面持ちで帽子を握りしめています。

医者は話を続けました。

「ミミズ病というのは、脳がミミズによって冒される病気で、段々ミミズの量が脳の中で増殖していきます。そして最後には……わかりますね？鼓膜を突き破って耳からそのミミズが飛びだしてくるのですー！」

医者がこの話を聞き終わると、素晴らしい娘はショックのあまり、その場に気絶してしまいました。

(自分はミミズ病なんだ……これは絶対に治らない病気なんだ)

素晴らしい娘は夢の中で絶望し、また現実の世界で目覚めてからも絶望しました。

ベッドの上から窓を見やると、激しい雨と風とが、強く屋敷の窓という窓を打っているのがわかりました。遠くのほうでは神鳴りが近づいてくる音が聞こえ、稲光が何度も素晴らしい娘の寝室を青く照らしてしまっていました。素晴らしい娘は自分の刑罰の時がとうとう近づいてきてしまったのだと思い、自分はもう駄目だと思いました。(神さま……わたしはもう駄目です。どうか、わたしのこれまでに犯してきてしまった罪を、どうかすべてお許してください。わたしは生きている間に本当にたくさん悪いことをしてきました……神さま、わたしはピーターの言うとおり、ちっとも素晴らしい娘などではないのです。本当はとても悪い、ひどく残酷な、恐ろしい娘です。本当に本当にどうかわたしのこれまでにしてきたことをお許してください。神さま、わたしは自分が川で溺れさせて死なせたねずみに、心から謝ります。わたしは今熱と頭痛でとても苦しいけれど、きつとねずみも同じくらいいいえ、わたし以上に苦しかったと思います。それからミミズ ミミズにも謝らなくちゃ……ミミズ病だなんて絶対に嫌なもの。神さま、どうかわたしのこれまでに犯してきてしまった罪をお許してください。わたしはミミズに対してもたくさん罪を犯してしまいました。神さま、どうか神さま……)

素晴らしい娘はうわ言で何度も許してください、許してくださいと言いましたが、神さまはまだ素晴らしい娘には悔い改めるべきところがあるとお考えになられたのでしょうか。病気になって三日目の夜、素晴らしい娘はこんな夢を見ました。

素晴らしい娘は真っ黒に塗りつぶされた闇の中で、どうしても身動きをとることができません。十字架にはりつけにされたイエスマのような、手や足が動かないのです。これは一体どうしたことだろうと素晴らしい娘は思い、首をきよろきよろと右と左にまわして

みて、あたりの光景にぎよっとしました　なんと！大きな闇色をした蜘蛛たちが、自分のまわりをとり囲んでいるではありませんか！
<この娘をどうしようか……？？>

<もちろん決まってるさ。食べるのさ>

<でもどこから……？？>

<そうさね。まずは首と胴体を切り離してみることにはしようかね。首と胴体を切り離してもニンゲンというのは生きているのかどうか、ひとつ試してみようじゃないか>

<そうしよう、そうしよう>

大きな黒蜘蛛たちはゆっくりと移動しながら、素晴らしい娘に近づいてきます。蜘蛛たちが手や足を動かして移動することに、巣が微かに揺れ、その微弱な振動が素晴らしい娘にも伝わってくるのでした。

(ああ、もう駄目……)

その時、一体何が起こったのか、素晴らしい娘には理解できませんでした。とにかく何かが起こったということだけは事実なようです。素晴らしい娘は風に舞う木の葉のように、ひらひらとどこかへ落ちてゆきました……。

(暗　転)

次に素晴らしい娘が夢の中で目を覚ますと、そこもまた真つ暗な闇の中でした。その上、また手と足が縛られてでもいるかのように、少しも動かすことができないのです。

もしかしたらまた蜘蛛たちが……と素晴らしい娘は不安になりましたが、あたりを見回してみても、そこに蜘蛛たちの不気味な姿はありません。

(これは夢なんだわ。わたし、まだ夢の続きを見ているんだわ。どうしよう。とにかく早く目を覚まさなくちゃ。何か恐ろしいことの起こる前に……)

素晴らしい娘は心の底から恐ろしかったので、夢なら覚めよ、目よ覚めよ、と何度も何度も繰り返して心の中で念じました。けれど結局なんの効果もありませんでした。そして素晴らしい娘がもしかしてこれは現実なのではないだろうかと疑い始めた頃、闇のずつと奥のほうで、ニワトリの声がしてきたのです。

(コッコッコッコ、コケッコ)

(コッコッコッコ、コケッコ)

(コッコッコッコ、コケッコ)

どうやらニワトリは一羽だけではないようで、闇の中にくぐもった反響を響かせながら、段々にこちらへ近づいてくるようでした。そして素晴らしい娘が気づいた時には、何十羽というニワトリが、素晴らしい娘のまわりをとり囲んでいました。

(わたし、このままニワトリに殺されるんだわ)

「コケッココー！」

一羽のおん鳥が白い翼を広げてそう叫ぶと、それを合図とするかのようにニワトリたちがいっせいに身動きのとれない素晴らしい娘に向かって飛びかかってきました。素晴らしい娘はぎゅっと目を閉じると、肉を引きちぎられる痛みと衝撃に耐えることを覚悟しました。が、痛みというものは一切ありませんでした。

次に素晴らしい娘が両目をそつと開けてみると、ニワトリは一羽を残していなくなっていたのです。あの大勢のニワトリたちはただ、素晴らしい娘の着ていた素晴らしいドレスを引き裂いただけで、素晴らしい娘の体には、傷ひとつ負わせはしなかったのです。

素晴らしい娘は最後に一羽だけ残ったおん鳥と目があうと、

(これはわたしの殺したニワトリだ)

ということが、動物的直感によってはっきりとわかりました。そしておん鳥は立ち去り際に、ニワトリ語でこう言い残していったのです。

「ワタシハアンタヲ許スヨ。
ぴいたあ二免ジテネ」

『ソウソウ。ぴいたあ二免ジテネ』

と、闇の奥深くで別のニワトリがもう一度おん鳥の言ったことを復唱すると、おん鳥は白い羽毛を何枚か残して、闇の中へと消えてゆきました。

ドレスをニワトリたちにびりびりに引き裂かれて下着姿になった素晴らしい娘は、これで自分の犯した罪はすべて許されたのに違いないと、ほっと胸を撫でおろしました。けれどもそうではなかったのです。何故なら、夢がなかなか覚めないからです。素晴らしい娘は夢の中で、何故夢が覚めないのだろうと不思議で仕方ありませんでした。そしてあることに気づくと、ぎくりと全身を強張らせました。

（わたしがいじめた生き物は、これが全部ではなかったはずだ。あとは何がいたつけ？ 蟻にトンボに蝶々にバッタ……）

するとその時、軍隊が足並みを揃えて行進してくるかのような音が、素晴らしい娘の耳の中に轟いてきました。

（まさか……）

素晴らしい娘が目を上げると、暗闇の上空には毒々しい鱗粉を撒き散らしながら蝶々が飛びかい、トンボのうなり声もどこか遠くのほうから聞こえてきているようでした。

蟻たちは闇と同一化してでもいるかのように、素晴らしい娘をぐるりととり囲んでいます。やがてバッタとキリギリスの合図によって素晴らしい娘は蟻の軍隊にかつがれてゆきました。そして素晴らしい娘がこれから自分はどうのような場所に運ばれ、どのように残酷な復讐をされるのだろうと泣きながら思った時、ようやく素晴らしい娘は目を覚ますことを許されたのです。

素晴らしい娘が泣きながら目を覚ますと、そこには心配そうな表情で素晴らしい娘のことを覗きこんでいる、お父さまとお母さま、それにばあやの顔がありました。お母さまは両手を胸のところを組みあわせるとわっと泣きだし、「おお主よ……」と何度も何度も呟いていました。お父さまは何も言わずに、ただぎゅっと素晴らしい娘のことを抱きしめてくれ、素晴らしい娘は自分がまだ夢を見続けているのではないかと、そんな気がしていました。そしてばあやがヤグルマギクの花束を自分に手渡してくれた時に、ようやくこれがまぎれもない現実であるということがわかったのです。

ばあやは何も言いませんでしたが、そのヤグルマギクの花束がピーターからのものであるということが、誰に何を言われなくても素晴らしい娘にはわかっていました。

ふたりで野原を散歩していた時、素晴らしい娘はピーターにこう聞いたことがあったからです。

『この花の名前はなんていうの？』
『それはヤグルマギクっていうんだよ』

素晴らしい娘はある晴れた午後の日のことを思いだし、感動に胸が焼きつくかのように熱くなるのを感じました。素晴らしい娘はお父さまの体にしがみつき、ずっと長いこと泣き続けました。するとお母さまも素晴らしい娘に抱きついて、もらい泣きするかのようになんて泣き続け、とうとうお父さままでが、黙って頬を涙で濡らしていました。

親子は三人で、互いに互いの体を抱きしめあいながら、ずいぶん長いことそうしていました。

素晴らしい娘はそれから一週間と経たないうちにすっかり元気を回復し、外へ遊びにゆく許可も得ることができるようになりました。お父さまはまたすぐに外国へと旅立っていかれましたが、素晴らしい

い娘はお父さまが自分のことをどんなに愛してくださっているかを深く知っているのです。もう以前ほど寂しいとは思わなくなりました。お母さまもこのごろは体調の良い日が続いているのらしく、素晴らしい娘と一緒に食事をしてくださることが多くなりましたし、素晴らしい娘はとても幸福に毎日を過ごしていました。

そして素晴らしい娘をとりわけ幸福にさせたもの それはピーターの存在でした。素晴らしい娘はヤグルマギクを見た瞬間に、すぐにこう直観したのです。『ピーターは自分のことを許してくれたのだと。』

自分はあるなにもひどい、残酷な、恐ろしいことをしたのに、ピーターはそれを目の前でつぶさに見つめていたのにも関わらず全部許してくれた。そう思うと、素晴らしい娘の小さな胸は、幸福のときめきにしめつけられんばかりでした。

今日、たった今これから、素晴らしい娘はピーターに会いにゆきます。

片手におやつの入ったバスケットを持ち、まるでバレリーナのように軽やかな足どりで、ロンシュタットの敷地内にある庭という庭の生垣を通りすぎ。そしてとうとう果樹園の林檎の木の下にピーターの姿を認めた時、素晴らしい娘の胸は歓喜という歓喜によってはちきれそうなくらいにどきどきと脈打っていました。

ふたりは林檎の木の下で出会うと、互いに互いを抱きしめあい、手と手をぎゅっと握りしめあいました。

「どうか、こんな罪深いわたしのことを許してちょうだいね、ピーター。わたし、本当にお馬鹿さんの悪い子だったわ……いいえ、どうかわたしに最後まで言わせてちょうだい。わたし、今度という今度こそは本当に心の底からわかったの。わたしには素晴らしい娘なんていう名前がちつとも似合わないんだってこと……でもせつかくお父さまとお母さまがつけてくださった名前ですものね、これからは見せかけだけじゃなくて、本当の素晴らしい娘になれるようにって、心からそう思うの。ねえピーター、わたしが本当の素晴らしい

い娘になるためには、あなたの助けがどうしても必要なのよ。これからわたしと、ずっとお友達でいてくださる？」

「もちろんだよ」とピーターは素晴らしい娘の鳶色の大きな瞳を覗きこみながら答えました。「ぼく、あのあとずっと後悔していたんだよ。女の子の顔をぶつだなんて、どんな理由があるにせよ、しちやいけないことだった。きみが病気になったって玄關番の人から聞いて、すぐくつらかったよ……エディアが早く良くなりますようにって神さまに毎日お祈りもした。そのためにならぼくはどんなことでもしますって神さまに誓ったんだ」

素晴らしい娘はピーターのその言葉を聞くやいなやたまらなくなつて、ピーターの頬に感謝のキスを雨あられと降らせました。そしてふたりは手をつなぎあつたまま、森への散歩道を歩いていったのです。道すがら、ピーターはビリーとジョージととくみあいの大喧嘩をしたと、素晴らしい娘に話して聞かせました。女の子の顔はぶつ勇氣はあるのに、ガキ大将と戦う勇氣はないだなんてそんなのはおかしいと思い、ふたりに立ち向かつていったけれども、結局惨敗してしまつたと、そうピーターは告白しました。

「だけど、あいつらと喧嘩してみても良かったよ。ビリーもジョージもぼくがあんまりしつこく食らいつくので、最後にはぼくのことをもう絶対にいじめないってそう約束したからね。ぼく、エディアが病気になつたって聞いた時、こう思つたんだ。自分にはどうしてこんなに力がないんだらうって。そしたらね、ずっと考えているうちに答えが見えてきたんだ。これからぼくはうんと勉強してえらい学者か何かにならうと思う。まだはつきりとはわからないけど、きみはお嬢さまだから、ぼくはとにかくうんと勉強してうんと偉くならなくちゃ駄目なんだってそう思うんだ」

「とても嬉しいわ」と素晴らしい娘は頬を染めながら答えて、それから今度は自分のことを話しはじめることにしました。病気で寝込んでいる間に、自分が見た恐ろしい夢のことや、悔い改めて神さまに心から祈つたこと、そしてお父さまが外国で電報を受けとり、す

ぐに帰ってきてくださったことなど……。

「ピーター。夢の中であのおんどりが……わたしが殺してしまったあのおんどりが、わたしに向かつて本当にこう言ったのよ。〈ピーターに免じてわたしのことを許す〉って。ねえピーター、あなたはこんな話、信じてくださるかしら？」

「信じるよ」とピーターは言いました。「ぼくはあのとプレイスさんの農場へいって、こう聞いたんだ。鶏小屋から脱走したおんどりはいませんかって。そしたらプレイスさん、病気になったのが一羽逃げだしまつたっていうから、もしかしたらこのおんどりじゃないですかってぼくは聞いたんだ。そしてその時にぼくはちょこつと嘘をついた。すぐそばの道端で死んでいたのを見つけたってそう言っただけ。そしたらプレイスさん、わざわざ運んでくれて悪いけど、それは病気のやつだからどこかへ捨てるなり埋めるなりして始末してね。それから、ぼくはプレイスさんに言われたとおり、近くの土手に穴を掘ってそこにおんどりを埋めた。ぼくはおんどりを食べてあげ

ないと可哀相な気がしたけど、何せ病気だったっていうからね……」

湖の前まで辿り着くと、ふたりは苔むした倒木に腰かけ、おやつを食べながら、そのあと色々なお話をし続けました。

「ねえピーター。あなたは本当に心からわたしのことを許してください？あんなにひどい、残酷な恐ろしいことをしてしまったわたしのことを？」

ピーターは許す、と言葉で答えるかわりに、素晴らしい娘の可愛らしい薄桃色の唇に、許しのキスをしました。

ふたりは、つい十日ほど前にここで別れたばかりなのですが、その時と今とでは、天と地ほどの違いがあるかのように感じられました。素晴らしい娘はピーターのことを以前よりもずっと頼りがいがあった男らしくなったように感じていましたし、ピーターは素晴らしい娘が病気を克服したあとで、以前よりもずっと女らしく、ふくよかになったように感じていました。

ふたりは辺りが薄暗くなって、かえるたちが夕べの合唱をはじめるところになってもまだその場所にいましたが、この時、ふたりの間を邪魔するものは何ひとつありませんでした。

終わり

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7642e/>

素晴らしい娘

2009年10月18日17時31分発行